

教育的魅力を高め 自ら考え、行動できる 自立した女性を育てられる大学へ

この春より大学の副学長に藤原雅憲教授が就任されました。

「大学の教育的魅力を高め、自立した女性を育てたい」という思いと

「言葉を自由に操り、よく考える人になってほしい」とおっしゃる藤原副学長に、

学生に期待することや大学の進む方向性についてお話を伺いました。



「教育研究上の目的」に沿った 質の高い教育力の保証へ

このたび副学長に就任するにあたりまして、これまでの金城学院大学の歩みを継承しつつ、本学の今後に対する思いをお話したいと思います。

現在、日本の18歳人口は減少の一途をたどり、18年後の18歳人口

は100万人を切るかもしれないといわれています。こうした状況において、大学に今後必要なのは、すべての学科において「教育的魅力」を高めていくことだと思います。本学においてはたとえば、国際情報学科にはKITやWLIなど、学生が人生観や世界観を問い直し、深めることができる魅力的なカリキュラムがあり

ます。また食環境栄養学科は管理栄養士国家試験合格率が100%（2014年度実績）という実力を持っています。こうした学科に限らず、すべての学科が高校生を惹きつけるような教育的魅力を高めていかなくてはならないと考えています。教員の方々には本学の学則にある「教育研究上の目的」に掲げられた

理想と日々の教育内容や教育方法を照らし合わせながら、理想の方向へ進められるように努力をしていたきたい。質の高い高校生が入学したくなるような、「質の高い教育力」を保証する大学にしていきたいと願っています。

学生から見た教育的魅力とは、学びのチャンスが多いことだと私は思います。学生の期待に十分応えられるような教育が行われていることが大切です。本学の教育的魅力は、女性が大学4年間で何を学び、行うべきかについてよく考えられたカリキュラムが多いことだと思います。大学とは、自分が社会に出たら何をしなければならぬのかという自覚を高める最後の砦です。大学でしっかりと学ぶことでこうした自覚を身につけておくことが大切です。本学の学びにはこうした力が養われるカリキュラムが豊富だと思います。

また本学のスローガンである「強く、優しく。」についても、その言葉を実際に具体化していくことが必要であり、学生の心にしっかりと刻まれるように、教員は常に努力していくことが重要だと考えています。

大学の施設をうまく活用し 自己の殻を破り、成長する

本学では、学生の学びきっかけや自覚へのきっかけを得る機会作りに全力で取り組んでいます。その一つとして昨年度、キャンパス内に新しくラーニングコモンズを作りました。ここでは学ぶ意思を持った学生が集い、お互いに知的な刺激を与え合うことができます。実際に足を運んでみると、学生たちは活発に議論や討論を行い、実に生き生きとしています。ところがここを利用する学生はいつも限定されているようです。また図書館でも、一人でも多くの学生が利用して本の楽しさを身につけられるようにとライブラリーサポーターズ・LiLianというサークルがさ



Profile

藤原 雅憲 副学長

専門分野 / 日本語教育 日本語学
研究課題 / 助詞不使用現象に関する語用論的分析 日本語教員養成の方法
所属学会 / 日本語教育学会 日本語学会 日本語用論学会

さまざまな企画を催して頑張っています。しかしこちらはまだまだ利用者は少ない。こうした施設を利用しないことは実にもったいないことです。決められた時間に来て決められた授業を受けて帰るのではなく、大学の施設をもっと貪欲に利用してもらいたい。毎日毎週自分の殻を破り続けていってほしい、それが立派な社会人になるための成長過程だと私は思います。

さらに学生には先生方をうまく利用してもらいたいとも思っています。先生に相談すれば今まで自分が気づかなかった視点が持て、さらに学ぶことができるでしょう。人生の先輩としてもっとぶつかってきてほしいと願っています。

言葉を自由に操り よく考えて行動する人へ

ほかにも学生に望むことは二つあります。一つは言葉を自由に操れる人になってほしいということです。聖書のヨハネによる福音書第1章1節に「初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。この言は、初めに神と共にあった。万物は言によって成った。成ったもので、言によらず成ったものは何一つなかった。」とありますが、やはり言葉があってこそ現実が表現できるものです。自分の今の思いを言葉に託すと

き、うまくできないと誤解を生じることがあります。言葉を粗末にすると言葉に裏切られる。つまり相手に真意を伝えられず、誤解を与えて相手が去ってしまうこともあります。

私自身言葉の専門家として今の学生を見ていると、多くは言葉の躰がなされないまま、大学生になってしまっているように思います。読書の機会も少なく、このままでは社会に出ても、その場にふさわしい言葉遣いができないこともあるでしょう。ぜひ学生一人ひとりが自覚し、大学4年間のうちに言葉の上手な使い手になってもらいたいと願っています。

もう一つは何事もよく考える人になってもらいたいということです。デカルトの『方法序説』の中に、「自分が考えて真であると認めなければ真実として受け入れない。注意深く速断と偏見を避けること」という言葉があります。普段の生活の中では、気づかないうちに偏見や誤解に基づいた行動が多く起こっているものです。ぜひ自ら行動を起こすときには「これは真である」と判断して行動してもらいたいと思います。人を頼って行動すれば、失敗したときの責任をどうしても相手に押しつけてしまうことになるでしょう。自分で決めて動き、失敗も自分で引き受ける。それが真の強く、優しい女性であり、こうした女性を多く輩出できる大学でありたいと願っています。